

平成31年度
入学試験問題

第3回

国語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

森村学園中等部

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

映画やテレビや広告なんかの産業のことを「文化産業」と呼んだりします。産業社会にとって重要なのは、文化産業を通じて、人びとの欲望をつくり出すことなんだ。

学校で資本主義*のしくみを習ったときに、「需要*しゅよう」ということばを教わったと思いますが、欲望というのも、一種の需要です。でも、ご飯を食べなくちゃいけないっていうレベルの「需要」とは違う。ご飯は一応食べられているし、眠る家もあるし、寒さをしのげる服もあるけど、でももっとおいしいものが食べたい、もつとかっこいい家具が欲しい、もつとおしゃれな服が着たい、そういうのが欲望です。

1、いちばんかわいいもの、おしゃれなもの、流行の最先端さいせんたんをいくもの、つまりみんなの欲望、あこがれや夢の中心の座をめぐる、産業は争うことになります。2、商品そのものよりも、それを持ったらかっこよくおしゃれなのか、という「イメージ」のほうが重要になってくるよね。それを演出するのがメディアなんです。

産業によって欲望が生み出されるようになると、どんなことが起こると思う？ それは、ものを買う人が、自分でものを欲しがることができなくなってしまうということだ。これがかわいい、あれがおしゃれだと、欲しいものはみんな、メディアが手取り足取り教えてくれる。だから、自分ひとりでは、いったいなにか欲しいのかわからなくなってしまうんだ。

もつと言うと、メディアがみんなに「生き方」を教えてくれるということになる。こういう生き方がかっこいい、こういうものこそ価値のあるものだ——そうやって教えられてしまうと、自分で自分の生き方を考えられなくなってしまう。

3、自分では、「アレ、かわいいから欲しい！」と思っているのは自分の意志や好みだと感じていて、それがメディアによってつくられた欲望だなんて思っていない。たしかに、欲しいと思っているのは本当なんだから、これはちょっと怖いよね。

4、自分の欲しいと思っているものが、本当に「自分」の欲しいものでないとしたら、それはいったい誰だれが欲しがっているものなんだろうか。

実は、その答えは、「みんな」なんだ。メディアを見て、これはきつとみんなが欲しがらるものだろう、うらやましがらるものだろうと思うものを、僕ぼくたちは欲しがっている。

そういうふうには、みんなが「みんな」を意識して、「みんな」のなかに巻き込まれていく。
(中略)

たしかに、みんながみんな同じものを欲しがってるわけじゃないと思う人もいるだろうね。でも、もちろん、メディアがつくり出す欲望は一種類じゃない。^②メディアはちゃんと欲望の種類を分類して、それぞれの欲望をひき出していく。

(中略)

ところで、「自分はそう思う」ということについて、「これは主観的な意見だけど」なんて言ったりするけど、それに対していま説明したような、「みんながそう思うだろうと思う」というようなことを、「相互主観性」と言います。

実は、資本主義の象徴的な存在である株劔というのもの、この相互主観性というしくみによって決まっています。そのことを説明しているのが、二〇世紀のイギリスの経済学者ケインズです。彼は、株式市場のしくみを、ある美人投票になぞらえて説明しているんだ。

その美人投票では、投票する人は一〇〇枚の女性の写真のなかから、美しいと思う六人の女性を選ぶ。でもこの美人投票のポイントは、多くの票を集めた上位六人を選んだ人に、賞品が与えられるということだ。

賞品が欲しいと思ったら、投票する人は、自分の好みの人——つまり自分が美人だなんて思う人を選ぶのではなくて、きつとみんなが美人だと思うのはこの人だろうなって思う人に投票しないといけない。

株式市場のしくみもこの美人投票と同じだとケインズは言っているわけです。

(中略)

メディアも同じ理屈でつくられているんだよ。テレビ番組をつくる人は、自分がいいと思う番組をつくるんじゃないかって、視聴者のみんなが見たいと思うのはきつとこういう番組だろう、と思うものをつくることになるんだ。産業社会の競争というのは、みんなが好むものを当てるゲームなんだよね。

初期の資本主義社会が成立する過程を描いた『モモ』の灰色の男たちは、労働者たちの時間を盗んだんだね。なぜなら、労働の時間とというのは、労働価値を生み出すもの、つまりお金を生み出すものだったからだ。

じゃあ、さらに進んだ二〇世紀のアメリカ型資本主義は、人びとからいったいどんな時間を奪っているんだろうか。アメリカ型資本主義は、労働者を消費者にすることによって成り立っている。だから新しい資本主義の奪うものは、労働時間じゃなくて、それが終わってからの「自由時間」のほうなんだ。

仕事や学校が終わって家に帰ると、みんな自由な時間、プライベートな時間を過ごすよね。働いたり授業を受けたりするのは、充実感はあるけど、束縛が多かったり、つらいこともあったりする。だから、家に帰ったら好きなことをして過ごそうと、楽しみにしているよね。だけど、この自由時間は、はたして本当に「自由な」時間なのかってというのが問題なんだ。僕たちは本当に「好きなこと」をして過ごしているんだろうか。

産業は、この自由時間にどんどん攻勢をかけてきます。この時間が、人びとの欲望を決めるからなんだ。現代では **A** をする労働時間よりも、**B** を生む自由時間のほうが、お金を生み出すうえでより重要なんです。だから、みんなの自由時間をどうつかまえるかと

ということが、産業界の「ステーク」になる。ステークってというのは、それをめぐって競争がおこるテーマのことを言うんだ。
(中略)

眠ってさえないなければ、ある時間を過ごすということは、たいていなにかを見たり聞いたりすることだ。なにかを見たり聞いたりするということは、なにかを感じたり考えたりすることでもある。つまり、時間というのは意識を生むものなんです。

意識は時間の関数^{*}です。難しい言い方だけど、つまり、過ごす時間が長ければ長いほど、それだけ意識も大量に生み出されるといふことです。だから、産業はできるだけ多くの時間を奪おうとする。それだけ多くの意識をコントロールするチャンスがもらえるということだからね。たとえば、一五秒間このCMを見てくださいというのは、一五秒間あなたの意識をつくり出す時間をください、ということの意味します。それによって、そのCMは、僕たちの意識にはたらきかける可能性をもつことになる。さつき話した欲望というのも意識のひとつのあり方だから、欲望をもってもらえるようにと、僕たちの意識にはたらきかけてくるわけだ。

たとえば、視聴率一五パーセントのテレビドラマは、日本の人口が一億人だとすると、一五〇〇万人の人が見ている計算になる。そのドラマが一時間なら、それだけの人たちの一時間分の意識にはたらきかける可能性があるというわけです。だから高視聴率を稼^{かせ}ぐことができるタレントは、たくさんのお金をもらうことができるんです。その人は、より多くの人のより多くの意識にはたらきかける力をもっているということになるからね。

さて、そこで、もうひとつみんなといっしょに考えてみたいことがあるんだ。それは「市場^{*しじょう}」というものについてです。

(中略)

意識にも「市場」というものがあります。きつと、みんなはもうそれがなにかわかるでしょう。答えは、「メディア」だね。

何千万人も人びとの意識が売り買いされている、メディアという「意識の市場」では、人間の意識に対して値段が決められます。この時間帯の一時間番組のスポンサー料は一五〇〇万円、というふうだね。ずいぶん高いと思うかもしれないけど、もしその番組の視聴率が一五パーセントで一五〇〇万人の人が見ていたとするなら、そのスポンサー企業^{きぎやう}は視聴者一人の意識を、一時間当たりわずか一円で買い上げていることになる。

⑤ そうして、メディアの市場で意識を買い取ることは、実際の品物の市場での取引に重要な効果を及^{およ}ぼします。たとえば、コカ・コーラが清涼飲料^{せいりやういんりやう}を販売^{はんばい}するときに、実際の清涼飲料の市場だけでペプシコーラやサントリーやキリンと競争するよりも、まず「意識の市場」で人びとの意識を買い取って、コカ・コーラゼロはこんなに素敵な飲み物で、これを飲む人はスリムでかっこいいんだ、っていうイメージをもってもらったほうが、ずっと効果的なんだ。だから、意識の市場は、他の市場の動向を左右する「上位の市場」の役目を果たすようになる。メディアというのは、人びとの意識にはたらきかける経済の活動でもあるんだ。

(石田英敬^{いしだひでたか}「自分と未来のつくり方」より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を書き改めたり、省略したりしたところがあります。

(注)

- *資本主義……………お金などの資本をもつ資本家が労働者をやとって利益を得る社会のしくみ。
- *需要……………あるものを必要として求めること。ここではとくに商品を買いたい求めようとする欲望を指す。
- *灰色の男たち……………ミヒヤエルエンデ作の童話『モモ』の登場人物。人々が節約した時間を盗んで暮らしている。
- *攻勢……………積極的に相手を攻撃しようとする姿勢。
- *関数……………二つの数字が関わりあつて変化したりすること。
- *市場……………ものの値段が決まる目に見えない取引のしくみ。

問一

- 1 から 4 に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | 1 | だから | 2 | すると | 3 | しかも | 4 | でも |
| イ | 1 | すると | 2 | だから | 3 | でも | 4 | しかも |
| ウ | 1 | だから | 2 | しかも | 3 | すると | 4 | でも |
| エ | 1 | すると | 2 | しかも | 3 | だから | 4 | でも |

問二

①「これはちよつと怖いよね」とありますが、筆者はどのようなことを「怖い」と述べているのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 産業によつて欲望が生み出されることで、人は自分でものを欲しがらなくなり、結果的に商品が売れなくなる
- イ メディアが手取り足取りすべてを教えてくれるので、人びとがメディアなしでは生きられなくなってしまふこと
- ウ 人の生き方までメディアが教えてしまうために、だれもが個性のない同じような生き方を目指してしまふこと
- エ 自分が欲しいと思つているものが、自分の意志で選んだものではないことに自分自身でさえ気づいていないこと

問三

——②「メディアはちゃんと欲望の種類を分類して、それぞれの欲望をひき出していく」とありますが、その具体例として適当でないものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アニメ番組の合間のCMで、その番組のキャラクターをパッケージに使ったお菓子の宣伝をする。

イ 女子中高生向けの雑誌では、流行のファッションを毎月特集ページで取り上げている。

ウ デパートの物産展では、試食コーナーを設けて各地の名産品を実際に味見した上で買うことができる。

エ 週末をひかえた金曜日の朝刊の折り込みチラシには、紳士服や自動車など、ビジネスマン向けの広告が多い。

問四

——③「同じ理屈」とありますが、どのような点で「同じ」のですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の好みを基準としながらも、周りの人たちの好みを自分で想像しなければならぬ点

イ 自分が好むものやいいと思うものではなく、みんなが好むものが優先される点

ウ みんなが好むものを当てようとして、自分自身の好みがわからなくなってしまう点

エ 物事を判断する際に、あえて自分の好みとは逆のものを採用することで成功する点

問五

——④「新しい資本主義の奪うものは、労働時間じゃなくて、それが終わってからの『自由時間』のほうなんだ」とありますが、新しい資本主義は、なぜ、「自由時間」を奪おうとするのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自由時間は労働から離れたプライベートな時間だから。

イ 自由時間には人びとがCMや広告を目にする機会が増えるから。

ウ 自由時間に入びとの欲望が生み出されるから。

エ 自由時間は蓄えたお金を人びとが使うための時間だから。

問六

A

B

には、対義語の関係にある言葉が入ります。その言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。なお、選択肢はA—Bの順になっています。

- ア 需要 — 供給 イ 供給 — 需要 ウ 束縛 — 解放
- エ 解放 — 束縛 オ 生産 — 消費 カ 消費 — 生産

問七

⑤ 「メディアの市場で意識を買い取る」とありますが、メディアが「意識を買い取る」のは、何のためですか。「意識」、「欲望」、「商品」の三語を必ず用いて、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問八

この文章で述べられている内容として適当でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちは、みんなが欲しがらるだろうと思われれるものを欲しがらる傾向にあるが、それは欲望がメディアによって作られたものだからである。

イ メディアが作り出す欲望は一種類ではなく、消費者の性別や年齢や人生のステージに合わせて、さまざまな種類の欲望が作り出されている。

ウ 経済学者のケインズが発明した、株式市場における相互主観性の原理は、現在では、テレビ局の制作現場で活用されるにとどまっている。

エ 初期の資本主義社会では労働者が働くことによってお金が生み出されていたが、現代の資本主義では、むしろ余暇がその点で重要な意味を持つ。

オ メディアは、人びとの意識をできるだけ安く買い取らうとするため、高視聴率を稼ぐことのできるタレントを安い出演料でCMに起用する傾向にある。

カ 現代では、実際の商品を取引きする市場よりも、人びとの意識を売買する意識の市場のほうが、経済の動向において重要な役割を果たしている。

問九

~~~~~「この自由時間は、はたして本当に『自由な』時間なのかっていうのが問題なんだ。僕たちは本当に『好きなこと』をして過ごしているんだろうか」とあるように、筆者は、現代の私たちが自由時間に本当に好きなことをしていないと考えています。次の三人の小学生のうち、この筆者の考えに最もよくあてはまる人を選び、その人を選んだ理由をわかりやすく説明しなさい。

Aくん 「もちろん僕は自由時間を本当に好きなことをして過ごしているよ。僕が今一番ハマっているのは、冒険もののスマホゲームなんだ。テレビCMで面白そうだなと思って入れたアプリなだけけれど、本当に楽しいし、関連グッズもかっこいいから、友達を誘ってやってるんだ！」

Bくん 「僕も自由時間は思いきり好きなことをしているなあ。僕は小さいころからマンガを書くのが好きだから、時間があるとノートにマンガばかり書いているよ。最近そのノートを友達に貸したら面白くなって言ってもらえてすごく嬉しかったんだ。でも授業中もマンガのことが頭から離れず、先生に注意されたりしたのはまずかったなあ。」

Cさん 「私は自由時間に好きなことをするって難しいかも。だって受験勉強でそもそも自由時間自体がほとんどないんだもん。少し時間ができたとしてもママに宿題やりなさいって言われちゃうし……。でも、周りの友達も同じように忙しそうにしているし、パパも土日もお仕事のことが多いから仕方ないかなって思ってるの。」



二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

商店街のアーケードの一番奥に「読書休憩室」という場所があった。アーケードの大家である「私」の父が、買い物客の休憩所にと倉庫を改造して作ったところである。「私」は父の仕事が終わるのを待ちながら、そこでよく本を読んでいた。「読書休憩室」には百冊ほどの本と魔法瓶に入ったホットレモネードが用意され、アーケードのどこかのお店のレシートを見せれば、誰でも好きなだけ利用することができた。そこには、レシートなしで出入りし、いつも「百科事典」を好んで読む同級生の「Rちゃん」という子もよくやってきた。

あれはどういうつもりだったのだろう。読書休憩室での過ごし方に変化をもたらすためなのか、ただ単なる気紛れからなのか、時折Rちゃんは声を出して百科事典を読むことがあった。読み聞かせる相手は私ではなく、まだ子犬のベベだった。犬に百科事典を読んでもやるにはどういうやり方がいいか、彼女はよく心得ていた。ベベが他の犬より多少お利口だとすれば、それはRちゃんのおかげかもしれない。

「アッピア街道 ローマから南イタリアに540kmにわたつてのびる古代ローマの幹線道路。紀元前312年に、ローマの監察官アッピウスにより建設されたことからこの名がついた。主に軍用道路としてつかわれたが、ギリシャとの交易路としても大きな役割をはたした。沿道には史跡が多い。舗装の一部はこのこつており、現在もつかわれている……」

ベベはRちゃんの足の間に体を納め、お腹を全部床につけ、気持ちよさそうに目を閉じているが、耳だけはりりしく立っている。その項目を際立たせる特別な数字やエピソードが出てくると、耳の先端がぴくりと動く。ベベはきちんとして講義を聴いている。

① 私はRちゃんの声が好きだった。それは小ぬか雨のように A して、落ち着きがあり、路面電車の音にも店主たちの「いらっしやいませ」の声にも乱されず、 B アーケードの中を満たしてゆく。はるか遠くから旅してくるアッピア街道を心からいたわり、余分なものは何も加えず、ありのままの姿で導いてくる。いつしか私は自分の本を閉じ、彼女の声に聴き入っている。ベベの耳は一段と研ぎ澄まされ、産毛の生えた内側の皮膚が C 赤らんでいる。Rちゃんの声に包まれながら、私たちはアッピア街道をどこまでも歩いてゆく。石畳は固く、白っぽく磨り減り、馬車の車輪の跡が窪みになっている。あたりにはオリブの林が続き、木々の間から、崩れかけた石造りの要塞や家畜小屋や水道橋がのぞいて見える。時折風が通り抜け、Rちゃんの手提げ袋と私の髪の毛を揺らす。ベベははしゃいで走り回り、私たちを追い抜いては振り向き、後戻りしてはまた追い抜いて、ひとときもじっとしてられない。空は信じられないくらいに青い。初めて見る空のはずなのに、なぜか私たちは懐かしい気持ちに浸っている。街道はまだまだ遠くまで続いている。

「早く、全部読み終わりたいなあ」

心の底からそう願うように、Rちゃんは言った。

「まだまだ、先は長いね」

どっしりと本棚に並ぶ百科事典の背表紙に、私は視線を落とした。Rちゃんはまだようやく第4巻に差し掛かったところだった。

「ねえ、見て。第5巻は「し」。し、一文字で一つの巻全部だよ。凄いなと思わない？」

「うん」

何が凄いのか自信が持てないまま、私はあいまいに返事をした。

「この世界では、し、ではじまる物事が一番多いの。し、が世界の多くの部分を背負ってるの。この、釣り針みたいな頼りない一文字が、実はひそかに一生懸命がんばってくれているんだよ。いいえ、自分は決して何の役にも立ってはおりません、みたいな顔をしてね」  
 労をねぎらうように、彼女は第5巻の背表紙の「し」を撫でた。

「でもね、だからと言って他の文字をないがしろにしているわけじゃないの。第10巻。栄光の最終巻。「むめもやゆよらりるれるわん」。む、から、ん、まで全部で十三文字だよ。十三文字が仲良く手をつないで、十分の一の役目をしっかり担ってる。それが、し、と比べて劣る役目だとは、私は少しも思わないよ」

うん、そうだ、確かにそうだ、と私はうなずいた。ベベも尻尾を揺らして床を一掃し、同意を示した。

「ああ、最後の、ん、はどんなふうになってるんだろう」

Rちゃんはガラス戸の向こう、アーケードの偽ステンドグラスを突き抜け、アツピア街道を通り抜けたもつと遠くのどこかを見つめて言った。そこを見つめ続けていると、最後の、ん、が支える世界の欠片が浮かび上がってくる、とでもいうかのようなようだった。私とベベは彼女の邪魔にならないよう、じっと大人しくしていた。

しかしRちゃんが百科事典の第10巻「ん」のページを開くことはなかった。厄介な内臓の病気に罹って、あつという間に死んでしまったからだ。

読書休憩室に取り残されたひまわりの椅子には、Rちゃんの重みが窪みになって残っていた。時折私はその窪みに掌を当ててみた。ひまわりはいつまでも冷たいままだった。一方、本棚の中で十冊肩を寄せ合っている百科事典には、決して手を触れなかった。不思議なことにやって来るお客さんたちもまた、誰一人百科事典を開こうとしなかった。そこにそれが並んでいることにさえ、気づいていないかのように見えた。それはただ一人、Rちゃんのための本だった。

初めて紳士おじさんがアーケードに姿を見せたのは、Rちゃんの死から半年くらいたった頃のことだった。すぐにRちゃんのお父さんと分かった。見覚えのあるあの手提げ袋を持っていたし、読書休憩室に入ってきてすぐ、たくさんの本の中から迷わず百科事典を手を取ったからだ。

紳士おじさんはお勤め帰りの夕暮れ時や休日の午後に来て来た。必ず手提げ袋も一緒だった。おじさんはそれをひまわりの椅子の背もた

④ れに掛け、小さすぎるのも構わずそこに座り、第1巻から順番に百科事典を広げた。こつそりのぞいて見ていたのではないかと思うくらい、Rちゃんのやり方と同じだった。

「どうぞ」

私は魔法瓶からホットレモネードを一杯注いで、丸テーブルの上に置いた。

「ありがとう」

と紳士おじさんは言った。遠慮してレモネードを飲まないところと、ちゃんとアーケードのレシートを持ってくるところだけ、Rちゃんとは違っていた。

「別に、無理にお買い物なさらなくてもいいんですよ」

私は言った。

「そう、堅苦しいルールじゃありません。レシートなんかなくても、自由にここへいらして下さっていいんです」

Rちゃんだってそうでした、という一言を私は声に出さずに呑み込んだ。

「いえ、無理をしているわけじゃありません。どうぞ、お気遣いなく」

と、紳士おじさんは言った。声の響き方がRちゃんによく似ていた。

おじさんは毎回、アーケードで何かしら小さな買い物をした。元々アーケードには大仰な商品を扱う店は少ないのだけれど、その中でもことさらに小さな品が選ばれた。絵葉書一枚、ピンブローチ一個、石英一欠け、ネジ一本。どれもこれも手提げ袋に入る大きさのものばかりだった。読書休憩室へ通うたび品物は増え、手提げ袋は少しずつふくらんでいった。

おじさんはただ単に百科事典を読むのではなかった。第1巻の、あ、からはじまって順番にページずつ、一字残らず全部、大学ノートに鉛筆で書き写していったのだ。

なぜそんなことをするのか、私は一度だけ父に尋ねたことがある。

「さあ、どうしてだろねえ」

あいまいな口調で父は言った。しかしそこには、わけが分からないというニュアンスではなく、余計な口出しをせずに見守りたいという静かな理解が含まれていた。

⑤ 「あの時、百科事典を買っておいて本当によかった」

そう、父はつぶやいた。

それは果てしのない作業だった。一日に数時間、来る日も来る日もただひたすら百科事典を書き写し続ける。小さい椅子に体を押し込め、背中を丸め、一字一句間違えないよう息を詰める。⑥ そこでは動物が駆け回り、歴史上の偉人がたたえられ、惑星が瞬き、工業機械が分解

されている。同じページの中で、河童とカッパドキアと活版印刷が仲良く並び、椰子蟹とやじろべえとヤスパースがにらみ合っている。もちろん、アツピア街道も真つ直ぐにのびている。

次々と大学ノートが文字で埋まってゆき、鉛筆は短くなってゆく。背中が痛み、ノートは汗で湿り、目はかすんでくるが、紳士おじさんは投げ出さない。理由も考えないし、むきにもならない。この世界を形作っている物事を一個一個手に取り、じつくりと眺め、感触を確かめてからまた元の場所に戻す。それを延々と繰り返す。かつて娘が探索した道をたどり、わずかな気配でも残っていないかと目を凝らし、どんなに望んでも彼女が行き着けなかった道を、身代わりとなって踏みしめる。

ホットレモネードを一杯注いだあと、私は紳士おじさんの邪魔にならないよう、中庭から読書休憩室を見つめた。ただべべだけは違った。べべはどんなに近くにいても、何の差し障りにもならなかった。Rちゃんの時と同じようにべべは、おじさんの足元に寝そべり、時々尻尾で床を掃きながら、鉛筆の音に耳を澄ませていた。

紳士おじさんの横顔は天井の小さな明かりに包まれている。右手は休みなく動き続け、視線は百科事典とノートを規則正しく行き来し、左手はそつと新しいページをめくる。いつの間にかおじさんの体が椅子に合わせて縮んでいるような錯覚に私は陥る。やがてRちゃんの残像と重なり合い、二人はどちらがどちらか区別がつかない一つの影になって、百科事典を旅している。アツピア街道を一緒に歩いてゆく。

紳士おじさんの来訪は何年も何年も続いた。終わりは来ないのではないだろうか、と感ずることもしばしばあった。それが不安のようでもあり、また一方で、永遠を願う気持ちもあった。しかし私の思いがどうであろうと、間違いなく百科事典は一ページずつめくられていった。「そ」「た」がいつしか「ち」「つ」になり、ある日不意に、第6巻が第7巻になった。

(小川洋子 『最果てアーケード』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) \* 監察官……役人などの業務を調査し、取りしめることを仕事としている人。

\* けりりしい……きりりとひきしまっていて勇ましい様子。

\* 要塞……敵の攻撃に対抗できるように造られた建物。

\* 大仰な……おおげさでわざとらしいこと。

\* 石英……鉱物の一種。

問一

——①「私はRちゃんの声が好きだった。」とありますが、百科事典を朗読するRちゃんの声を聞きながら、「私」が「アッピア街道」を思い描いているシーンが三行後の「私たちは」から書かれています。この「私」がアッピア街道を空想している部分はどこまでですか。最後の七字をぬき出しなさい。

問二

A から C に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア うつつすらと
- イ のびのびと
- ウ ひたひたと
- エ ひっそりと
- オ たっぷりと

問三

——②「どっしりと本棚に並ぶ百科事典」とありますが、この部分と対照的な表現が、Rちゃんの亡くなった後のことを述べた文章中にあります。その部分を十五字以上二十字以内でぬき出しなさい。

問四

~~~~~ a 「労をねぎらう」・~~~~~ b 「ないがしろにしている」とありますが、a 「労をねぎらう」・ b 「ないがしろにする」の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 労をねぎらう

- ア 人にあまり苦勞がみえないようにかくす
- イ がんばっているものをいたわりなくさめる
- ウ どんな苦勞があつたのか想像する
- エ よくわからないことを適当にごまかす

b ないがしろにする

- ア 軽く見てそこに存在していないかのようにあつかう
- イ まるで箱の中で守るかのように特別に大切に見守る
- ウ 周りから内側が見えないように白くしてかくす
- エ 後回しにして注目されないようにごまかす

問五 —— ③「私はその窪みに掌を当ててみた」とありますが、この時「私」はどのような気持ちだったと考えられますか。二十五字以上三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問六 —— ④「Rちゃんのやり方と同じだった」とありますが、次にあげる紳士おじさんの行動の中でRちゃんと同じやり方であるものを全て選び、記号で答えなさい。

ア 帰りの夕暮れ時にやってくること

イ ひまわりの背もたれに手提げを掛けて座ること

ウ 百科事典の第一巻から順番に広げること

エ レモネードを飲まないこと

オ アーケードで買い物をしてレシートを持つてくること

問七 —— ⑤「あの時、百科事典を買って置いて本当によかった」とありますが、父が「よかった」と思ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア Rちゃんが百科事典を愛読し、さらにその父親が亡き子を偲ぶ手立てとして百科事典を使い、百科事典が人と人を結ぶ役目を果たしているから。

イ 歴史的なことや世界のことなど古い記事がいろいろと記され、忘れ去られてしまいそうな事実のわかる百科事典を手に入れることができたから。

ウ 百科事典によつてRちゃんや私をはじめとして多くの子どもたちが「読書休憩室」を利用するきっかけになり、有効的に活用されているから。

エ Rちゃんや紳士おじさんのように時間をかけてでも写したいと思うくらいに百科事典が人々に好まれ、その内容に価値が見出だされたから。

問八

⑥「ここでは動物が駆け回り、歴史上の偉人がたたえられ、惑星が瞬き、工業機械が分解されている。同じページの中で、河童とカッパドキアと活版印刷が仲良く並び、椰子蟹とやじるべえとヤスパースがにらみ合っている」とありますが、これは百科事典のどのような特徴を表現する説明ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 百科事典にはジャンルに関係なく、あらゆる項目が、五十音順に並んでそれぞれの世界を作っている様子
- イ 動物や人物の様子が百科事典には詳しく書かれ、その動物が生き生きと駆け回っている様子
- ウ 河童やカッパドキアや活版印刷のように全く関係ないと思われる事項でも実は関連があるという様子
- エ 無生物の活版印刷ややじるべえなども表現方法によっては擬人化することができ、豊かな比喩ができるという様子

問九 次の会話文は、この文章を読んだ小学生が感想を語り合っているものです。あとの問いに答えなさい。

Aさん 「百科事典」が愛読書って変わっているけど、Rちゃんが百科事典を好きで読みたいという気持ちを「私」はわかってあげられていたのかな？

Bさん 「私」はRちゃんが読み聞かせてくれる「アツピア街道」の景色の中で空想をめぐらせながら旅している様子が描かれているところからも「私」はきつと楽しんで聞いていたんだと思うな。だからRちゃんのことをわかってあげていたと思うよ。

Cさん わたしも理解していたと思うわ。だって「私」は「彼女の邪魔にならないよう」気をつかっておとなしくしているでしょう。読書休憩室で百科事典を読むときが、Rちゃんの心が一番 I になれる時であることを理解してRちゃんの I を尊重してあげていたんだと思うの。

Aさん なるほどね。じゃあ、娘がやり残したことからただひたすら百科事典を書き写し続ける紳士おじさんのことを「私」はどんなふうに見ていたと思う？

Dくん 紳士おじさんはもしかしたらとRちゃんと一緒に過ごす時間が少なかったかもしれないと思うんだ。だからおじさんはきつと百科事典を書き写すことで II 。そうすることで、 III としていたんじゃないかな。

Bさん 自分より先にこどもを亡くすなんて想像できないくらいにつらいことなんだろうな。

(1) I に当てはまる漢字二字の熟語を考え、漢字で記しなさい。 I の二か所には同じ言葉がはいります。

(2) II ・ III ではどのような発言をしたと考えられますか。この物語の本文と四人のやりとりをふまえた上で、それぞれにあてはまる最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

II

ア 娘と仲良くしてくれていた「私」と自分も仲良くなるうとしていたんだよ

イ 娘ができなかったことを代わりにやり遂げようとしていたんだよ

ウ 娘が大好きだった百科事典を自分も好きになろうとしていたんだよ

エ 娘を構ってあげなかった自分に罰を与えようとしていたんだよ

III

- ア 私たちを勇気づけよう
- イ 天国の娘に認めてもらおう
- ウ 早く娘の事を忘れてしまおう
- エ 娘の死を受け入れよう

三 次の①から⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 彼女は何でもキヨウにこなす。
- ② フロクを目当てに雑誌を買う。
- ③ 彼ががんのトッコウ薬を発明した人だ。
- ④ 近ごろの若者はサホウを知らない。
- ⑤ 飛行機がチュウガエリして飛んで行った。
- ⑥ 銀行でヨキン残高を確認する。
- ⑦ 朝食はナマタマゴをご飯にかけて食べた。
- ⑧ 弟は大器バンセイするタイプだ。
- ⑨ 精米し立てのごはんがおいしい。
- ⑩ 彼は古巣の球団にもどった。
- ⑪ 遠くから汽笛が聞こえる。
- ⑫ 方位磁石を用いて、東西南北を確認する。